

天眼鏡

アニマルウェルフェアの先

以前にも紹介したことがあるように記憶するが、山梨県甲州市の塩山に黒富士農場の直売店がある。桃をはじめとする果樹地帯に住宅が点在する分りにくい場所に立地している。二地域居住している筆者は、山梨で卵を購入する時にはいつも黒富士農場の直売店に足を運ぶ。

黒富士農場は、甲州市から車で小1時間、甲府市の北方、昇仙峡に近く、標高1100mの山の中にある。もともとは旧塩山市の果樹農家であったものが、1950年頃から採卵鶏を導入し始め、徐々に規模拡大してきたが、混住化にともない83年に現在の場所に移転したもので、私が利用している直売店は黒富士農場の創業の場所に設けられたものである。

黒富士農場は2014年に日本農業賞大賞や内閣総理大臣賞を受賞していることもあって、かなり知られた存在ではある。当初、大量生産型養鶏を目指して92年には12万羽まで規模拡大をすすめたが、地元小学校の見学に来た生徒の、狭いケージで身動きのとれない鶏の姿を見て発した「かわいそう」との言葉に衝撃を受け、自然放牧養鶏へ転換したという。放牧を導入するとともに、家畜排せつ物を在来有用微生物のバクテリアと岩石のミネラル分で分解し、生物活性水とするBMWという污水浄化システムを基本技術としている。そして時代の変化に対応して、その後、有機JAS認証や山梨県アニマルウェルフェアの認証を取得したという以上に、県等と一体となって認証の仕組みづくりをリードする等、先駆的かつ精力的な活動展開を続けてきている。

本稿で今回特に取り上げておきたいのが、直売店の塩山店の動向・取組である。上で触れたように、商店街や市街地、幹線道路からも離れており、あちこちに「たまご村 黒富士農場塩山店」へと案内する標識は置かれているものの、正直、きわめて分りにくい場所にある。そうした場所ではあるものの、客の出入りは多く、車6、7台は置ける駐車スペースにけっこう車

が止まっている。直売店にはたまごだけでなく、鶏肉（冷凍）やクッキー、アイスクリーム等の加工品も置かれているが、大変失礼ながら、基本的にはしよせん“たまご屋”であり、わざわざこんなところまでたまごを買いに来る客がいるというのが不思議なほどで、しかもいつも何人かのお客でにぎわっている。自らがここに足を運ぶ理由を考えると、放牧卵を基本に置き、安全・安心、そしておいしいということが大きく作用しているのであろう。

その塩山店はこの数年の間にいくつかの変化が見られる。一つ目は店舗の入り口横をコテージ風に改造し、ここで風を感じながらゆっくりと休憩できるスペースを設けたこと。二つ目はその周りを石組みしたりして各種ハーブを鑑賞できるようにしたこと。そして三つ目に鶏を放し飼いするスペースと小さな小屋を作り、ここで子どもたちが遊べるようにしていること。あわせて遊具も設けられていることもあって、子どもたちがここで鶏と戯れているのを見かけることもできる。

先に述べたように黒富士農場はアニマルウェルフェアにも率先して取り組むという以上にリードしてきた実績を持つが、家畜、鶏の「幸せな暮らし」ととどまらず、家畜・鶏と触れることによる「自然・動物と人間との交流」、ひいては「人間の幸せ」をも射程に置いた取組みをすすめているようにも感じる。

日本の畜産情勢にはきわめて厳しいものがあるが、持続可能な畜産経営を確保していくためには、生産性の向上だけでなく、衛生管理に配慮しながらではあるが、人間が家畜に触れ家畜と交流する場を設けていくことも求められる時代にきているように思う。直売店は塩山店を含めて三つあるが、全体売上の約3分の1を直売店が占めているという事実が、その重要性を如実に物語っているように感じる。

（農的社会デザイン研究所 代表 高谷栄一）